

版では元のページはそのままに残し、改訂増補分 56 ページを巻末に追加している（索引には追加分も組込まれた）。追加された内容は、学名の変更、種類の追加、異名・雑種などに関する意見、記載の補充、分布の追加など、合計 500 余件に上っている。その中の新名（新組み合わせおよび新位置）60 個は別に取出して有効に記載されている。更に新図（基準標本の写真など 60 点）15 ページと、科・属一覧表 4 ページが含まれている。このように本書はますます内容が充実してきた。シダの分類には欠かせない文献の一つである。

(伊藤 洋)

□ Miller N. G. (ed.) : *Advances in Bryology Vol. 4. Bryophyte Systematics.* vii+264 pp. 1991. J. Cramer, Berlin.

コケの分野でも、種子植物の後を追って、新しい手法が導入され、その手法による分類や系統に関する論文が続々と出ている。本書はコケの分類学関係の 8 編の総説が収録され、新しい手法による最近の成果が紹介されている。

その 8 編のタイトルは、コケの分類学と個体群生物学への酵素電気泳動法の適用；生態遺伝学，進化拘束とコケの分類学；ゼニゴケ類の二次化学（二次代謝産物）；実験室および温室での培養とコケの実験分類学；蘚類の系統解析における個体発生データの利用；腋果性蘚類の科の分類の基礎；コケの研究，特に分類学におけるデータの電子処理；“緑藻”と“コケ植物”との間の系統的なつながり，である。DNA 塩基配列の解析による分子系統学的研究は最近の分類学におけるトピックスの一つであり、コケでもすでにいくつかの論文が出ているが、本書にその関係の研究のレビューは載っていない。どうやら、新しい方法論の普及はコケの分野では種子植物に比べてかなり遅れているようである。

本書の「エピローグ」で、長年、記載分類に携わってきた蘚類分類学の大家の H. クラムは、最近、分類学に導入されたこれらの手法を評価し、コケの分類学でも新しい研究を大いに推進すべきであると述べている。しかし、同時に、その研究は植物をよく知っている分類学者によって行われ

るべきであると釘をさしている。

「コケの分類学と個体群生物学への酵素電気泳動法の適用」の総説では、コケの種はしばしば遺伝的に多型であり、表現型ではほとんど区別ができない個体群の間にも、遺伝的には大きな分化が起こっているケースが多いことを示している。例えば、ジャゴケは北半球の温帯地域に広く分布し、通常、ユニフォームな種と見なされているが、電気泳動法によるアイソザイム解析によれば、遺伝的に大きく分化した同胞種（隠蔽種）からなることが分かった。それらの同胞種は地理的にまとまっており、ヨーロッパに 1 種、北米に 1 種、ヨーロッパと北米に分布する 1 種、日本に 1 種の、計 4 種からなり、それらの間の遺伝的距離は、ある場合には、維管束植物の属間に普通に見られる程度の大きさであるという。その他、倍数性の由来（同質倍数性が異質倍数性か）、雌雄同株のコケにおける同一個体間での受精の頻度、繁殖システムの解析など、従来の研究手段では解明しがたい問題のヴェールが次々と剥がされている。

「“緑藻”と“コケ植物”との間の系統的なつながり」の総説は、緑藻植物と陸上植物との系統関係を分岐分類学の手法で論じたものであり、陸上植物が単系統群であり、コレオケーテないしシャジクモに近い緑藻から由来したと結論づけている。この総説は、緑藻とコケとの系統関係というよりも、むしろ緑藻内の分類群間の系統を中心に扱っている。そして、コケもシダも種子植物もつっこみで、有胚植物（陸上植物）として一括されており、コケの研究者が知りたい、コケとシダとの系統関係や、コケの高次の分類群間の系統関係に触れていないことが不満である。それらの分岐分類学研究はすでにいくつか発表されているので、本書のタイトルに忠実であるためにも、まず、コケを中心とした研究を紹介すべきであった。

(北川尚史)

□ Yamagishi T.: *Plankton Algae in Taiwan (Formosa)* (山岸高旺：台湾産浮遊性藻類) 252 pp. 1992. Uchida Rokakuho, Tokyo (内田老鶴圃，東京) ¥12,360.

台湾のフローラは、高等植物や海藻については、

戦前の日本人学者の研究あるいは戦後の台湾の研究者の努力などによりかなり明らかになったが、こと淡水藻となると、調査は断片的で我々の知識は極めて不完全である。著者の山岸高旺博士はここ数年4回に亘って渡台し、中華民国政府環境保護署の協力を得て、延べ約2か月滞在し、淡水藻類の調査研究に従事した。採集場所は50余で、池、灌漑用水、養魚地、湖沼、ダムなどほぼ台湾全土に及ぶが、本書では台湾西部と東部の池と養魚地29地点の藻を扱い、種組成のやや異なる湖沼とダムの藻類は後報で扱うと序言で述べている。なお、書名は浮遊性藻類であるが、扱われるのは淡水産の藻である。本書は前半の178ページに種の記載と文献表があり、後半は写真とスケッチで占められる。種数は藍藻類52、黄金色藻類11、黄緑藻類6、ユーグレナ藻類165、緑藻類298、計531種で、珪藻類は扱われない。先に日本淡水藻図鑑の編集者として日本のこの分野の研究の進展に寄与するところが大きかった著者の山岸博士は、今回台湾の淡水藻の研究にも大きく貢献することとなった。このことは日本の淡水藻の種分類、種分化の研究にも貴重な基礎資料を提出したことになり、本書刊行の意義は大きい。(千原光雄)

□吉山 寛著・石川美枝子画：原寸イラストによる落葉図鑑 372 pp. 1992年12月初版、1993年2月第22版、〒162 東京都新宿区西五軒町13-10 文一総合出版、¥2,500 (税込)。21×11 cm。

本州で見られる樹木のうち、高山植物や分布の特に狭い種を除いた528種の画と、それに関係のある72種、合計600種を分類順に紹介したもので、野生種を主としているが、街路樹や庭木なども含まれている。落葉と銘打っているが、落葉樹とは限らず常緑樹も入っている。各ページには大きな葉が1枚か、時には2-3枚が載っていて、複葉には小さく示した全形と大きい小葉片といった具合。ここで特徴的なことは、ほとんどの葉が原寸大(ホオノキのような特大のものはやや縮小して)で出ていて、葉形・葉脈・葉縁・毛などの様子が植物画家石川氏の線画によって実によく描かれていることである。着色はないが読者には実物と「絵合わせ」することによって「あっ、これだ」とすぐ木の名がわかるという寸法である。ページを繰っていると、原色図鑑よりはるかに瞬間的な印象が強く、葉形が脳裏に焼き付けられる。この点最近流行のカラー写真図鑑などは足下にも及ばない。画で現せない葉の厚みや光沢・色、さらに樹皮・樹形その他の特徴、分布など簡明に画の傍らに記載されている。一般に樹木は草本に比べて花の時季を失することが多いが、葉の方は落葉を含めて年中簡単に見られるので具合がよい。しかも葉の特徴は案外はっきりしているものなので、本書と絵合わせすることによって訳なく種類を当てること請合いである。細長い変形版だが、手に持ってバラバラめくるには手頃な形である。良い本である。(伊藤 洋・金井弘夫)